

第2分科会記録

テーマ「障害のある子どもの自立と社会参加をめざした進路指導・職業教育」

研究報告者：柳澤亜希子（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所研究員）

話題提供者：秋山秀二（千葉県立千葉特別支援学校教諭）

井上通子（大阪府立だいせん聴覚高等支援学校教諭）

藤井茂樹（パーム子どもクリニック顧問）

司会： 原田公人（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所総括研究員）

第2分科会については、まずはじめに、司会の原田総括研究員より、本分科会の趣旨、研究の経緯についての概略説明を行った後、柳澤研究員より平成 22-23 年度に実施した研究成果についての報告、上記3名の話題提供者からの実践報告があった。

柳澤研究員は、平成 22-23 年度専門研究 A「特別支援学校高等部（専攻科）における進路指導・職業教育支援プログラムの開発」の研究成果を報告し、本研究で提案したプログラムの4つの柱である「校内連携」「関係諸機関との連携」「卒業後の支援」「保護者（家族）への支援」について概要説明を行った。また、秋山氏と井上氏は、特別支援学校（知的障害）と特別支援学校（聴覚障害）における4つの柱に関わる取組について報告し、藤井氏は福祉・医療の立場から地域における障害のある子どもとその家族への支援の実際について報告した。

各報告の後には活発な質疑応答が行われた。最後に司会より今後の特別支援学校における進路指導・職業教育の展望が述べられた。（以上、要項 P.21 参照）

<研究報告についての質疑応答>

（事前に参加者からいただいた質問より）研究所としての進路指導、職業教育、キャリア教育のそれぞれの捉えについて

柳澤研究員：中央教育審議会の答申「今後のキャリア教育・職業教育の在り方について」に基づき進路指導、キャリア教育・職業教育の捉えについて説明した。キャリア教育は社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力・態度の育成であり、育成すべき力は職業教育にも含まれている。職業教育は、特定の職業に就くために必要な知識・技能・態度を育成する。職業教育はキャリア教育で求められている力を育成するうえで有効とされている。これまでの進路指導は進路先決定に主眼が置かれていた感があったが、本来は進路選択・進路決定の過程で自分がどのように生きたいのか考える活動である。これを見直すために、キャリア教育では自立に必要な力を幼児期から体系的に育てていこうというのが新たな視点である。進路指導の本来の考えは、キャリア教育に引き継がれている。

<秋山氏の実践報告についての質疑応答>

参加者：就労支援コーディネーターの役割について教えてほしい。ハローワークでの定着支援は全国的に行われているのか。

秋山氏：就労支援コーディネーターは始まって2年目である。専任で進路指導副主事が行っている。進路指導担当の経験がない教員がその担当になると、動き方に差が生じやすい。定着支援については、ハローワークが就職して2ヶ月くらいで職場に様子を見に行くのは全国的な取組だと思う。

参加者：一般就労が難しい重度の子どもには、どのように進路指導・職業教育を行っているのか。

秋山氏：本校では、職業課程として進路学習を教育課程に位置づけている。3グループに分け指導しており、1グループでは生活面の指導を中心とし日々の学級での取組と連動させて指導している。

参加者：校内連携について、キャリア教育の視点で小・中学部・高等部の連携を密にしていこうとしている。授業の中にどのように進路指導の視点を取り入れて取り組んでいるのか。

秋山氏：本校の研究でもキャリア教育を取り上げ、小・中学部・高等部を縦で考えているが、改善が必要である。

<井上氏の実践報告についての質疑応答>

司会：(事前に参加者からいただいた質問より)卒業後の支援は、いつまで行うのか。保護者支援での難しさは何か。学校に来ない保護者には、どのように対応すればよいか。

秋山氏：卒後3年を目安に定着支援を行っている。在校時から4年間のバトンゾーンを設定し、引き継ぎを行っている。事業所等の巡回で対応し、担当者と情報交換を行っている。保護者支援としては進路懇談会等を開催するが、一番関わりが深い担任に対しての情報提供が重要である。進路指導担当は、黒子(くろこ)として担任を支援している。

井上氏：1年間のフォローアップを行っている。しかし、企業から相談があればいつでも相談に応じている。保護者支援については、就労している保護者は忙しい方が多いため、学校に来たときに個別に相談に応じるようにしている。同じく本校も基本的には進路指導担当は黒子で、担任が中心となって対応する。

司会：研究協力者の河合氏の寄稿に基づき進路指導の教育課程上の位置づけの留意点として、法令で示された目的・目標に基づき学校の教育目標を踏まえた進路指導の目標を設定すること、進路指導の目標と各部の目標との系統性、一貫性に留意すること、また進路先に応じ、また、高等部前の生徒の教育の場を踏まえた教育の連続性に配慮することが挙げられる。

<藤井氏の実践報告についての質疑応答>

司会：ネットワークが重要ということだが、それを作るためにキーとなるのは何か。

藤井氏：ネットワークを作ってから支援するのではなく、子どもや家族を中心に人と人をつなぐことを繰り返しやっていく中でネットワークがつくられていく。

<まとめ>

秋山氏と井上氏には、自校での進路指導・職業教育での一番の課題について述べていただいた。

秋山氏：校内連携。一部の担当者だけでなく、校内全員で情報を共有していくことが重要である。

井上氏：同じく校内連携。全職員で対応することが大切である。

最後に、司会より以下のようにまとめがなされた。本研究を実施した4年間、重複障害や発達障害のある子ども、特別支援学級から特別支援学校(知的障害)の高等部に進学する子どもの数が増加しており、子どもの実態の変化が顕著となっている。それによって障害のある子どもの進路先も多様化しているため、彼らの以前の在籍先での状況を考慮して連続性をもたせた進路指導・職業教育が重要になる。今回、提案した4つの柱は、複合的に絡み合うものである。卒業後の生徒の姿を見据えて、一貫した指導を行うことができるよう校内職員全員が担当者として取り組んでいくことが必要である。加えて、障害のある子どもの自己理解や自己肯定感といった心理面の育ちへの指導も行っていくことが求められる。